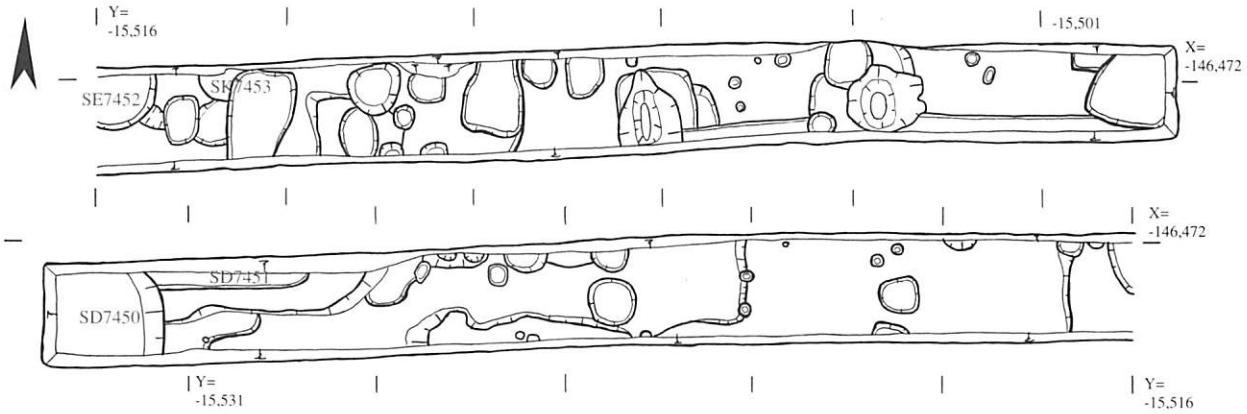

図68　第293-6次遺構平面図　1：120

面側の先端を斜めに切り落とす。切り取られた面は、互いに水平になるようにとられている。用途は不明であるが、側面から先端にかけて摩耗が認められること、内面と外面とでは角坐の摩耗の度合いが著しく異なり、内面側の摩耗が顕著であることなどは、使用状況を推定する材料となろう。

なお、本例ときわめて類似する鹿角製品が、滋賀県米原町入江内湖遺跡で採集されている（梅原末治「珍しい鹿角器」『考古学雑誌』第42巻第3号　1957、佐原真「弥生式時代」『彦根市史』上冊1960、金関恕「図版目録・解説118鹿角製品」『日本原始美術大系』5　1978）。角幹の基部に方孔をもち、角幹と第一尖の先端を尖らせたもので、長さ15.5cm。使用痕が観察されており、方孔に柄を装着し鍬として使用されたとの推定もある。この資料は、弥生時代中期に位置づけられているため、共伴資料の年代との相違など今後に課題は残る。　（次山　淳）

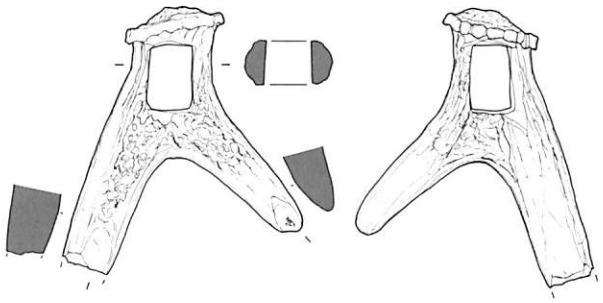

図69　SE7452出土鹿角製品　1：3

4．まとめ

東六坊坊間東小路の路心の座標はX＝－15,527.6と想定されている。東小路の路幅を側溝心々で20尺と考えると、今回検出したSD7450は、東六坊坊間東小路西側溝の想定位置にあたる。SD7450が古代の西側溝を踏襲した中世の溝であると考えることもできよう。しかし、今回、東小路東側溝にあたる遺構は検出しなかった。むしろ、小西通りが遺存地割に由来するとみて、SD7450はその東側の排水溝である可能性もある。SD7450の性格付けについては、当該地域の条坊制の実際とも絡み、今後の調査例の増加を待って結論したい。　（山下）

平　城　専こらむ欄　③

◆転任者のイチゴン

10年一昔とはよくいったもので、9年ぶりに戻った研究所は、思っていた以上に変貌していた。たまたま今年は、朱雀門や東院庭園の竣工・公開、奈良市制100周年記念のイベントと'98平城京展の開催など、平城宮跡発掘調査部にとって大きな事業が年度当初から重なったせいかもしれないが、考える間もなしに数ヶ月間が過ぎてしまった。

加えて12月には平城宮跡の世界遺産登録もあった。平城宮跡が、もはや確実に整備活用の段階に入っているとの印象を深くした。自分の庭のような感覚でいた平城宮跡が、別の人の手に渡りつつあるような感じを抱いた。しかし、これが本当の意味で国民の遺跡として還元されつつあるのであれば望ましいことである。

アジア各国との研究交流、とりわけ中国との合同調査の進展は目を見張るものがある。かってはほとんど手つかずのテーマであったから、この点に関しては、はっきりいって浦島太郎で、もっとも不安に感じた仕事である。都城を研究する組織として極めて重要なテーマだけに、今後の安定した研究体制づくりが可能かどうかが問われそうである。

たくさんの個別研究会にも驚いた。以前も、発掘報告をまとめる目的で内裏検討会や朝堂院検討会などの合同研究会を開いたことはあったが、所員から個別テーマを募って研究会を保障するシステムは、新しい展開である。主に発掘と報告書の作成に集約されていたノルマが、今やいろいろなところに個別に嫁せられつつあるようでもあり、うがった見方をすれば、エージェンシー化の準備が着々と進んでいるようでもある。　（T）